

編集後記：定期的に開催される「天気」編集委員会にて、時折会員数の減少が話題となる。会員数の減少は、気象学会全体の問題であることはもちろんだが、編集委員会としても、より魅力的な雑誌とするため新しいシリーズ記事の企画を進めるなど、危機感をもっているところと認識している。

会員数減少の詳しい実態は把握していないが、主たる割合を占める学生会員が卒業に合わせて退会してしまうのだろうか。あるいは気象学の高度な知識を必要とするはずの気象庁の中で、新たに会員となる人員が減少しているのだろうか。その原因は、学会に所属することのアドバンテージや必要性を感じられないからだろうか。個人的にも思いを巡らす今日この頃である。

学会に所属するアドバンテージとしては、大会への参加、論文投稿、「天気」講読、が直ぐ思いつくところであるが、個人的には、このソサイエティを介して、同業者と意見交換ができることや、同僚や同窓の活躍に触れられることも、退会せず良かったと感じる点である。

ただ、ソーシャルな繋がりが SNS で無料かつ簡単に形成できる時代にあって、大会への参加や成果発表を常としない方々にとっては、気象学会というソサイエティへの参加はハードルが高い、あるいは必要性が希薄なのかもしれない。アカデミックな体にこだわらないのであれば、某巨大 SNS にて直接研究者と繋がった方がリアルタイムで活発な議論ができる可能性があるからだ。と、このようなことを考えていると、会員数減少を改善することは難しいのではないかと

思えてくる。

一方、筆者の周りには積極的に学会に参加しているわけではないものの、何十年も会員を継続している方も少なからずいる。このような方々の考えが参考になるかもしれないと、昔聞いた話を思い返してみる。筆者の尊敬する元上司は、“お布施”と称して会費を払っているという。行動や成果で貢献出来なくとも、会費を払うことで少しでも気象学分野をサポートしたいとの思いがあるそうだ。必要性に迫られずとも会員を継続している方々には、遠からず同様の思い、すなわち、気象学の発展を願う気持ちがあるのかもしれない。

私見だが、このような思いを逆に応援すべく、永年勤続表彰という文化にならって、20年、30年と会員を継続された方に対し、貢献度によらずその変わらぬサポートに対し表彰するという取り組みがあれば、退会者数を少しは減らせるように思う。

ちなみに、以下完全に蛇足だが、筆者の元上司のように「学会へお布施を納めている」と表現すると、聞く人によっては誤解されることがある（筆者実体験より）。学会への勧誘を布教活動と比喻して“お布施”と表現したもののようなのだが、個人的には“投資”と表現した方が誤解もなく、気象学の発展を願う気持ちや、それが廻って自身を含む国民の利益となる仕組みをより適切に表現できるように思う。今後、折を見て筆者の周りの若手に、この“投資話”を持ちかけてみることにする。

(梅原章仁)